Ⅳ　東大寺写経所における食器構成の復元

1　器種と器名とのちがい

2つの分類の狭間で　Ⅱ章では正倉院文書所載の食器の名前を整理し、Ⅲ章では平城宮・京出土土器を、考古学的な分類記載法に即して整理したうえで、それらに対応するとみられる古器名をあててみた。両者を合一し古代の食器構成を再現するためには、古代の器名と、考古学上の器種名との関係を整理しなければならない。ところが何度も述べてきたように、両者はつねに1対1の関係にあるわけではないから、考古学上の器種名を、古代の器名へと読み替える必要がある。その前に、ここまでの検討でどのような齟齬が生じているか、いくつかの事例を示しておこう。

もっとも多い食い違いは、古代における埦・坏・盤の別と、考古学者の認識における椀・杯・皿とが必ずしも整合しないことである（Fig. 31）。例えば、古器名における「片埦」や「鋺形」は、その字のごとく埦の仲間であるが、考古学的分類のなかでの一大タクソンである「杯（つき）」のなかに包摂されてしまう。「陶埦」が大口径の須恵器杯Ａ・杯Ｂに、「土片埦」や「土鋺形」が土師器杯ＡⅠにあたるのは、まさにその一例である。これとは逆に、古代の坏が、考古学者にとっての椀に含まれる場合もある。例えば奉写一切経所関連文書に頻出している「土窪坏」は、間違いなく土師器椀Ａに対応する。

同様にして、古代の坏と考古学上の皿との間にも、不整合が生じている。上でみた「土片坏」は、しばしば皿ＡⅡとして記載されるが、これはその一例である。ただし、まったく同じ大きさ（口径×器高）の食器を、考古学者は杯ＣⅠと呼ぶこともある。同じ大きさの食器を、杯とも皿とも呼ぶ―要するにこの不整合は、考古学的分類の階層性の問題でもある。

ここで主張したいのは、土器の実名に対して、考古学上の仮名ともいえる器種名がいかに適切でないか、ではない。そもそも考古学上の器種分類は、古代における実用食器の再現を第一の目標として考案されたわけではないから、古代の分類に合致しないのは当たり前である。したがってこの食い違いは、将来ぜひ解決されるべき問題なのではない。しかし問いたいのは、考古学上の器種名に馴染んでしまうと、古代の土器を食器として、つまり生活用具の一種としてとらえなおそうとするとき、無意識的に「ボタンを掛け違

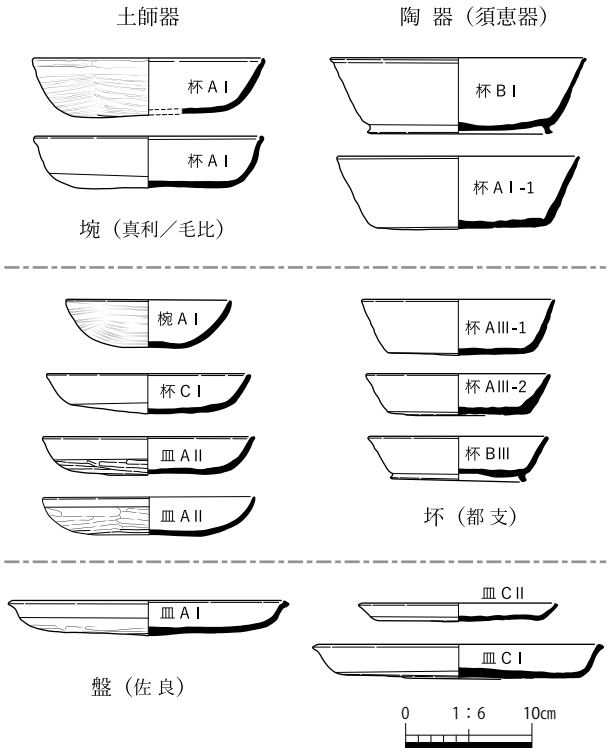

Fig. 31　考古学上の「器種」と古器名との関係

える」ことになるのではないか、ということである。

椀・杯・皿にＡ・Ｂ・Ｃ・・・をかけ合わせて、さらにⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・と整理してできあがる「言語」が、考古学者の思考法を固定してしまう。換言すれば、それは「ほかの分類法に気づきもしない」という悪弊があるということである。例えば、前章５節では、平城宮土坑 SK820 の土器群において、土師器の「片坏」はおもに杯ＣⅠからなるが、それだけでなく杯ＡⅢと呼ばれた器形をも包摂するとした。ひとつの実用器種を標準的な大きさ（口径×器高）で識別しようとする見方は合理的であるし、当然可能である。しかしこの見方に気づいた自らが、いちばん最初に違和感を覚えたのはなぜだろうか？それは「杯Ａはやはり杯Ａ」という刷り込みが強すぎて、杯Ｃとは実用食器の位相において同質であるという見方を、これまで一度もしてこなかったからである。つまりこの違和感は、あくまでも奈文研における・考古第二研究室的な「習慣」に根差したものであって、新たな見立ての合理性とは、何らかかわりがなかったのである。

考古学者は、目の前に同じような大きさと深さの食器が２つあっても、口縁部の細部形態がちがえば、両者は「異なる器種」であるとみなす文化に属している。しかし、本書で問われるのは、大同と小異とのどちらをより重視するか、である。小異を分類の基準とする立場からは、古代の食器はそれこそ数十種からなるわけだが、正倉院文書に見える古代の器名は、食器にかぎればせいぜい数種類である。古代の土器を食器として、生活用具のひとつとして認識しようとすれば、小異を捨てて大同を取るということになる。

以上の葛藤をふまえたうえで、奈良時代における食器構成の復元をおこなおうとするならば、それは古代に実在した文化的コードをなるべく復元し、それにもとづいて考古学的器種を古器名へと翻訳することとほぼ同義になる。考古学的な器種分類を完全に排して、本書でのみ通用する器名本位の分類を樹立してしまうことも、あるいはできたかもしれない。しかし筆者以外の他者にとっては、やはり不便なことのほうが多いであろう。したがって、古器名と器種という、２つの分類体系の狭間では、両方から参照できるようにしておくしか方法がないのである。

2　器名考証

正倉院文書に見えている食器の器名と、考古学的な器種名との間には、このような不整合が存在していることを正しく認識したうえで、実際の土器に古器名を与えてみよう。本節こそが、本書の核心にあたるのである。以下、土師器と須恵器とに分けて器名考証を試みる。

i　土師器食器

片埦・片坏・片盤　土師器食器の器名は、天平宝字４年末とされる「造金堂所解案」と、宝亀３・４年の奉写一切経所関連文書に見えている。また、土師器生産の関連史料である「浄清所解」からは、土器作手・借馬秋庭女が作った土師器の種類と員数がわかる。これらの器名と、平城宮・京から出土する土師器食器とは、じつのところよく合致するが、器名考証をおこなううえで、一部の器種名を整理統合する必要がある。

Fig. 32 では、平城宮出土の土師器に対して、正倉院文書所載土器の名前を与えた。この図によれば、片埦・片坏（枚坏）・窪坏・片盤は法量・器形においてそれぞれ離散的な関係にある。ところがⅢ章で何度か述べたように、片坏はいくつかの考古学的器形を含んでいることが明らかとなった。すなわち杯

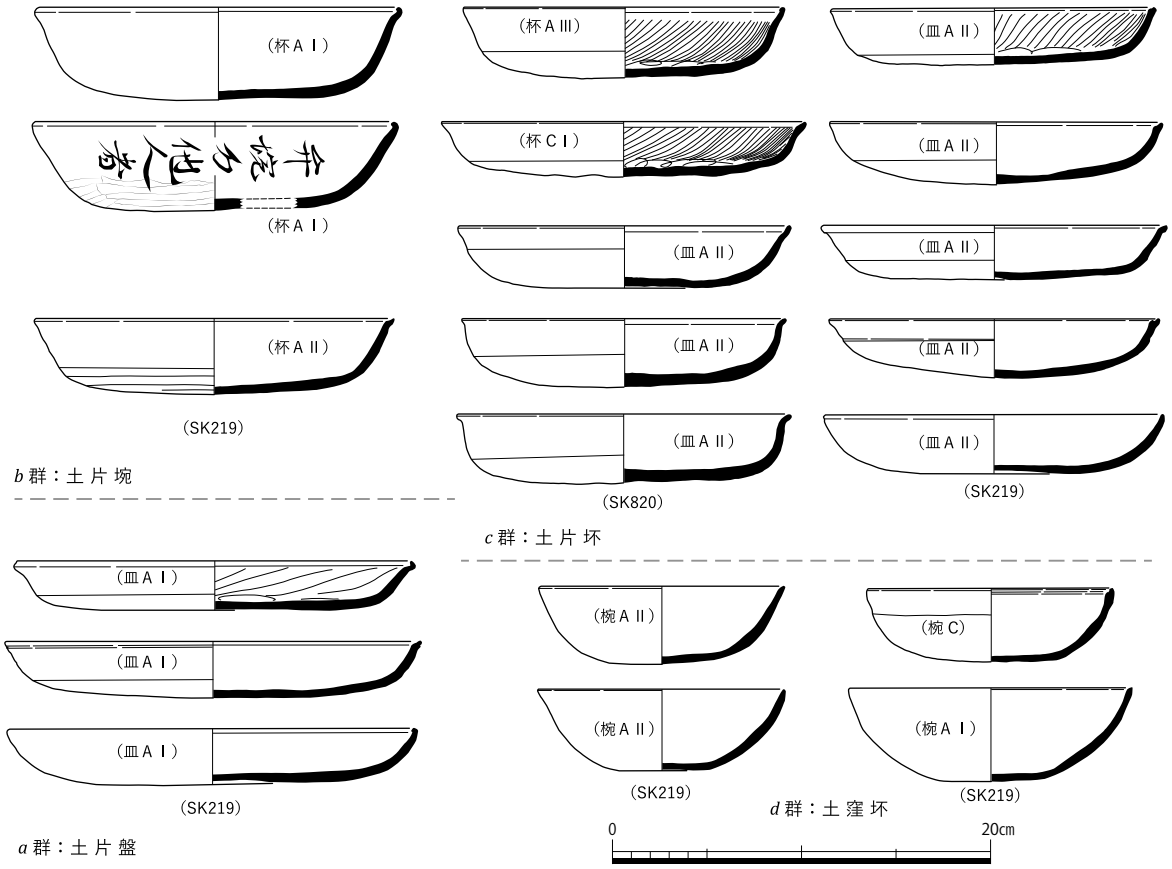

Fig. 32　土師器食器の器名比定（奈良時代後半）

ＣⅠ・皿ＡⅡ・杯ＡⅢの三者である（図版１）。考古学者はこれらを器形および器表面に残る技術痕跡、ならびに胎土および色調にもとづいて区別する（Ⅲ章の Fig. 20・22 などを参照）が、法量の基本的な一致をとくに重視すれば、土師器の片坏には３つのタイプがある、ということになる。このようにして整理した結果、奈良時代の土師器食器はせいぜい４～５種類を数えるにすぎず、正倉院文書に登場する土師器の器名とはほぼ整合する。

なお、天平勝宝２年の「浄清所解」には鋺形、片埦、片盤のほかに「田坏」という器名が見える。これは写経所文書には登場しないが、「田」が「手」の転訛であるならば「手坏」、すなわち小皿の意になると思われる。借馬秋庭女が作った田坏は 2,400 口と多く、ほかの器種よりも小口径の食器であったことは想像にかたくない。奈文研分類では、土師器皿Ｃと呼ぶものがこれにあたるか。

鋺形と片埦　　土師器における埦・坏・盤のちがいは明らかだが、鋺形と片埦とのちがいははっきりしない。「浄清所解」では鋺形と片埦とを明瞭に区別しており、明らかに別器種とみえるが、そのちがいが何によるかは判然としない。いっぽう、天平宝字４年末とされる「造金堂所解案」では「鋺形片埦」という名前が見えていて、その解釈にやや窮する[1)]。それがひとつの器種を指すのか、それとも１口２文の鋺形と、１文の片埦とに区別できるのかがわかりにくいからであるが、本書では後者の見方を採る。つまり、両者は帳簿上で一括されることもあるくらい法量・器形が似通っているが、金属器志向が強いのは鋺形のほうであったと解する。土師器の鋺形ないしは片埦は、いずれにしても土師器杯ＡⅠないしは杯ＡⅡに対比できるものと思われる。そうすると深手でより鋺に似せた杯ＡⅠのほうが鋺形で、それ

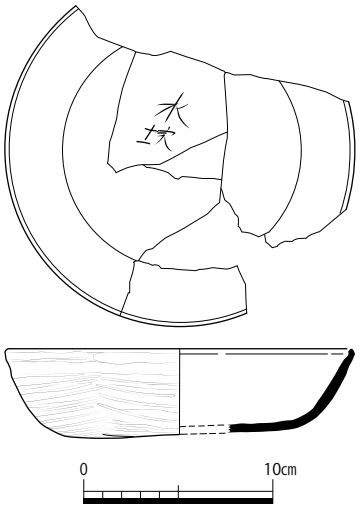

Fig. 33　SK19189の「水埦」

よりもやや浅い杯ＡⅡが片埦であったとするのも一案である。

Ⅲ章２節でも少し触れたが、内底部に「水埦」との針書を施した杯ＡＩが、平城宮 SK19189・19190 で出土している（Fig. 33）。この針書は片埦ないしは鋺形が「水埦」でもあった可能性を示しており、長らく筆者を悩ませたが、この事例は次のように解釈したい。すなわち、「水埦」という符牒は現代の「お茶碗」のごとく、飯器（主食用の食器）の名前として当時通用しており、土師器の飯器たる片埦ないしは鋺形とは親和性が高かった。そこで１個体の杯ＡＩにおいて、片埦と「水埦」とが偶々同居することになったのである。

宝亀３・４年の奉写一切経所関連文書には、「土水埦」という有蓋食器の名前も見えるが、土鋺形に比して影が薄い。それは土水埦がもともと少なく、しかもほとんど消費されないからである。土鋺形と土水埦との関係は、奈良時代の土器群における杯ＡＩと杯Ｂとの量的関係にそのまま置き換えてよいであろう。要するに、土師器埦のなかで優勢なのは土鋺形＝杯ＡＩのほうであって、土水埦＝杯Ｂはつねに少数派である。しかしこの両者は、その用途・用法において区別ができないから、土師器のほうでは水埦≒鋺形・片埦という構図が成立するのである。なお延暦 23 年（804）８月の「皇太神宮儀式帳」[2] には、年料土師器（朝夕御饌器）のなかに水真利 480 口が見えている。このときは助数詞「口」で数えているので、この水真利は無蓋埦（つまりは土師器杯ＡＩ）であったことになる。この文脈では、土師器の無蓋埦も水埦たりえたわけで、少数派の有蓋埦を補完しつつ、水埦＝飯器という一大カテゴリを構成していたものと思われる。このように土師器のほうでは、鋺形や片埦の異名として、「水埦」という用途名称をあてることもあった。

ii　須恵器食器

麦埦と水埦　　Ⅱ章５節で述べたように、天平宝字２年の御願経書写のときには、7 月 24 日付で「麦埦」と呼ばれた食器が 150 口請求されている。平城京出土例のなかにも「麦埦」「麦」と書かれた墨書須恵器があり（Fig. 34・Tab. 11・図版２）、史料中のそれとは同じものであることは、別に論じたとおりである[3]。そのなかで筆者は、御願経書写のときにかぎらず多くの写経事業において、索餅と呼ばれる麺類を大量に消費していることに着目し、先の麦埦がこの索餅を食するために請求されたものと考えた。麦埦の「麦」字は、麺類のことを指しているのである。ところがこのとき、麦埦 150 口はついに支給されなかった。その代用を果たしたのは水埦 109 口と埦 41 口だったのである。

この事実からいえるのは、その用途において麦埦と水埦とが姉妹器種であったということである。水埦はその名義上、水を飲むためのうつわであったかに思えるが、それが麦埦の代用を果たしていることからみて、おそらく食器としても用いられたであろう。麦埦と水埦とのちがいは目下のところよくわからないものの、仮に須恵器に書かれた墨書「水」が水埦の符牒であるならば、それは深手の無台埦（奈文研分類では須恵器杯ＡＩ・椀ＡＩ・杯Ｅなど）にあたる可能性がある。例えば、藤原宮東内濠 SD2300 出土の須恵器杯ＡＩ・杯ＢＩには「水」字を墨書したものが２例あり、その口径×器高はそれぞれ 197.0 × 78.0㎜（無台）と、162.0 × 75.0㎜（有台）である（『飛鳥藤原概報 9』）。どちらも口径が比較的大きく、

Tab. 11　平城宮・京出土「麦」字墨書須恵器

出土遺跡・地区	遺構	器種	部 位	口径（mm）	器高（mm）	高台径（mm）	墨書	図番号	出 典
平城宮20次	SD2700	杯蓋	頂部外面	-	-	-	水／麦	Fig.34-6	『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ（奈文研1983）-174
平城宮128次	SK9608C	杯蓋	頂部外面	-	-	-	□／□／□粥／［］／麦		『平城宮出土墨書土器集成』Ⅱ（奈文研1989）-437
平城宮172次	SD2700	杯蓋	頂部内外面	-	-	-	（内面）□／五（外面）麦		『平城宮出土墨書土器集成』Ⅲ（奈文研2003）-355
平城京左京二条二坊十二坪	SK69	杯Ｂ	底部外面	-	-	128.0	麦垸	Fig.34-1	『平城京跡出土墨書土器資料』Ⅰ（奈良市2002）-066
平城宮133次	SD1250	杯Ｂ	底部外面	173.0	62.0	127.5	麦子	Fig.34-4	『平城宮出土墨書土器集成』Ⅱ（奈文研1989）-573
平城宮	SD8600	杯Ｂ	底部外面	173.3	36.5	130.0	麦坏	Fig.34-2	『奈良文化財研究所紀要2017』（奈文研2017）
平城宮2次	SA109北溝	杯Ｂ	底部外面	181.0	56.0	130.0	麦	Fig.34-5	『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ（奈文研1983）-001
平城京左京三条二坊（二条大路）	SD5100	杯Ｂ	底部外面	210.0	75.0	138.0	麦	Fig.34-3	『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』（奈文研1996）
平城宮21次	SB2472	杯Ｂ	底部外面	-	-	130.0	麦		『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ（奈文研1983）-119

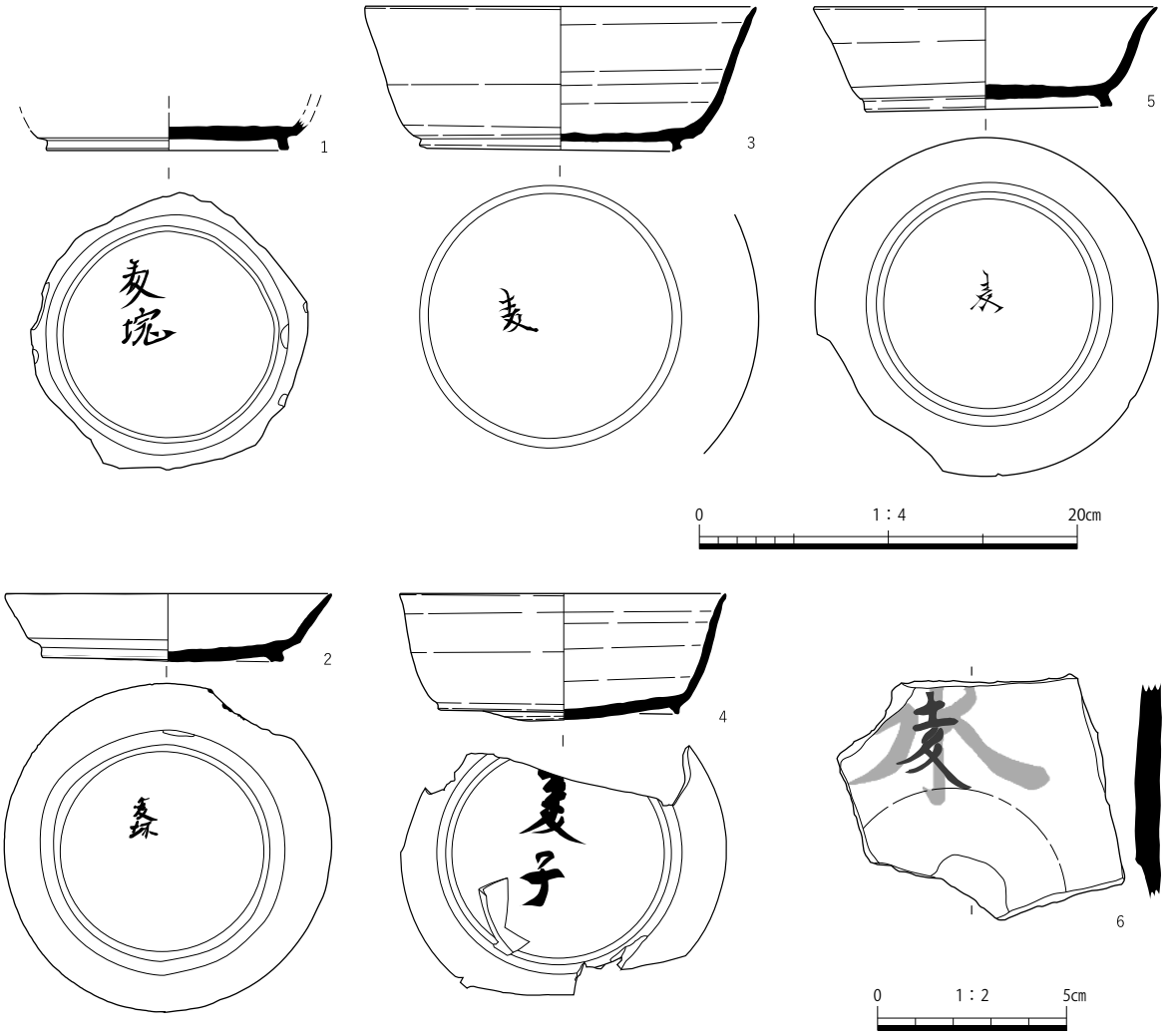

Fig. 34　平城宮・京出土「麦」字墨書須恵器

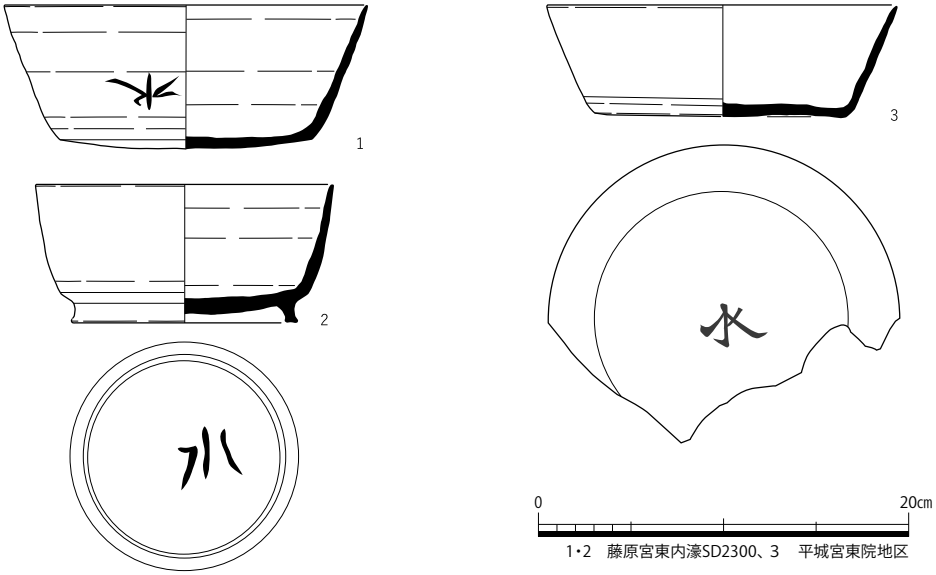

Fig. 35 「水」字墨書須恵器

深手の須恵器埦である（Fig. 35）。また、平城宮出土の「水」字墨書須恵器にも、189.0 × 61.0㎜の 1 例があり[4)]、これも水埦にあたるものか。いっぽう麦埦は、現在のところ高台を付した深手の須恵器埦（奈文研分類では須恵器杯ＢＩと呼ぶ）がその候補となる。平城宮 SK820 出土須恵器でいえば、麦埦と水埦とが混淆することによって、*b* 群（Ⅲ章 2 節の Fig. 24）が形成されたということになろう。この両者をどのように識別するかは明らかでないが、「水／麦」字墨書須恵器の例からもわかるように、古代においてもその区別は難しかったものか。

天平勝宝 3 年以降の写経所文書では、麦埦はわずか 1 箇所に見えるのみだが、（陶）水埦（または水麻利・水麻理とも）は全部で 26 箇所に登場する。つまり水埦は史料上の頻出器種である。これに対し、単に「陶埦」という器名も 11 箇所に見えていて、それが麦埦か、それとも水埦であったかはわからないが、使用時には両者が区別されていなかったことを暗示する事実ともいえる。そこで本書では、深手の無台埦が水埦、有台埦が麦埦であった可能性に留意しつつも、両者を無闇に区別することはせず、合わせて陶埦という一群をなしたと考えておく。

羹坏・饗坏・塩坏　須恵器杯Ａならびに杯Ｂのうち、大口径かつ深手のものが古代の陶埦にあたるならば、これよりも口径が小さく、また浅手の杯Ａ・杯Ｂは、主として坏（つき）にあたるはずである。さて羹坏とは、その名のごとく羹（汁物）の専用器と思われるが、『奈良朝食生活の研究』にも詳しい解説はない。同書によれば、塩坏は調味用と読めるが、饗坏にいたっては「あるいは酒坏の如きものであったろうか」とあるのみ（327 頁）で、用法は必ずしも明らかでない。しかし饗坏と塩坏とは、周忌斎一切経書写のときに混同されているのを見たように、調味用の坏という点では用法に似通ったところがあったとみえる。饗坏とは醤や末醤、酢などを調和させた調味料である「齏（あへもの）」または「饗料」の容器なのであって、塩坏と同様に、それ自体が「おかず」用の食器であったわけではないのである。このように推量すると、饗坏ならびに塩坏は須恵器杯Ａ・杯Ｂのなかでも小口径のものであったと思われ、羹坏は水埦・麦埦と饗坏・塩坏との中間を占めていたと考えられよう。要するに、口径ならびに器高が小さくなるにつれて、麦埦・水埦＞＞羹坏＞＞饗坏・塩坏という序列があったものと思われる。

Tab. 12　写経所文書等にみえる羹坏・片坏・塩坏と併記事例

年次	日付	史料	大日本古文書	坏系器種				
				羹坏	片坏・枚坏	塩坏	饗坏	窪坏
天平勝宝4	閏3月17日	写書所雑物請納帳	12-238		坏	塩坏		
	閏3月20日	写書所雑物請納帳	12-239		坏	塩坏		
	閏3月26日	写書所雑物請納帳	12-240		片坏	塩坏		
	閏3月28日	写書所雑物請納帳	12-241		坏	塩坏		
	4月1日	写書所雑物請納帳	12-241		片坏	塩坏		
天平宝字2	7月24日	東寺写経所解（案）	13-476	羹坏			饗坏	
	7月24日	写千巻経所食料雑物納帳	13-254～257	羹坏			饗坏	
天平宝字4	6月25日	奉写称讃経所解（案）	14-404		陶坏	塩坏		
	8月6-7日	後一切経料雑物納帳（中欠）	14-423			塩坏	饗物坏	
	8月28日	後一切経料雑物納帳（中欠）	14-426	羹坏		塩坏		
	10月2日	後一切経料雑物納帳（中欠）	14-430	羹坏		塩坏		
	8月14日	後一切経料雑物下充帳（首欠）	25-272		土坏	塩坏		
	12月？	造金堂所解案	16-295・296		陶片坏　土師片坏	陶塩坏		
天平宝字6	2月9日	筥陶司充器注文	5-104		陶坏	塩坏		
	12月16日	奉写二部大般若経用度解（案）	16-067		坏	塩坏		
	閏12月6日	奉写二部大般若経料雑物納帳	16-123	陶羹坏		塩坏		
	閏12月8日	奉写二部大般若経料雑物納帳（案）	16-129	陶羹坏		陶塩坏		
天平宝字7	4月23日	東大寺奉写大般若経所解（案）	16-381	陶羹坏		陶塩坏		
天平宝字8	7月29日	造東寺司解（案）	16-513		坏	塩坏		
	8月17日	大般若経料雑物納帳	16-519		枚坏	塩坏		
宝亀3	8月11日	奉写一切経所解	6-387・388		陶枚坏　土片坏			土窪坏
	12月30日	奉写一切経所告朔解	6-458・459		陶枚坏　土片坏			土窪坏

Tab. 12 には羹坏・饗坏・塩坏の併記事例をまとめておいた。これによれば、羹坏と片坏（あるいは単なる「坏」）とは交互に出現し、併記されることが一度もないが、そのいずれかが必ず、饗坏か塩坏と併記されていることがわかる。つまり羹坏と片坏とは同じ器種を指し、それは饗坏・塩坏とは別の器種である。いっぽう、塩坏と饗坏とは、前者を後者の一部として数える事例（Ⅱ章7節）があることから、その区別があいまいである。よってその考定にあたっては、羹坏と饗坏および塩坏という2つのクラスタを、陶埦・陶盤のほかに見出せばよい。

このような見通しに立ち、おもに平城宮で出土した須恵器食器を用いて器名考証をおこないたいが、この作業には2つの問題がある。その第一は東大寺写経所と同時代（天平宝字年間）で、須恵器食器を多く含む土器群が少ないこと。そこでやむを得ず、これよりもやや古い平城宮 SK820（天平末年頃）と平城京二条大路 SD5100（天平12年頃）の土器群から須恵器食器を抜き出してきて、760年代の東大寺写経所で用いられた食器構成を再現することになるが、ここで第二の問題に直面する。それはこれらの土器群において、須恵器食器がじつに多法量的な様相[5]を示し、単に羹坏・饗坏・塩坏の三者を決めるだけなのに、その候補を絞り込むのが案外難しい、ということである。そこで細かく分類された考古学上の器種を、古器名に対比可能なかたちへと再整理する必要がある。

須恵器食器の法量分布図（Fig. 23・28）によれば、SK820 では合計8群、SD5100 でも9群のクラスタを識別でき、それぞれが古器名のいずれかに対応するものと思われる。このうち、SK820 の *b* 群が陶埦（麦埦）に、そして *g*・*h* 群が饗坏や塩坏にあたると考えると、羹坏≒片坏（または坏）とさまざまに呼ばれた器種は、SK820 の須恵器食器では *d* ～ *f* 群に絞られてくる。そこで例えば、器高が小さい *e* 群のほうを、のちに陶枚坏に転じることを重視して陶羹坏（陶片坏を含む）に、そして器高が大きい *f* 群を陶埦

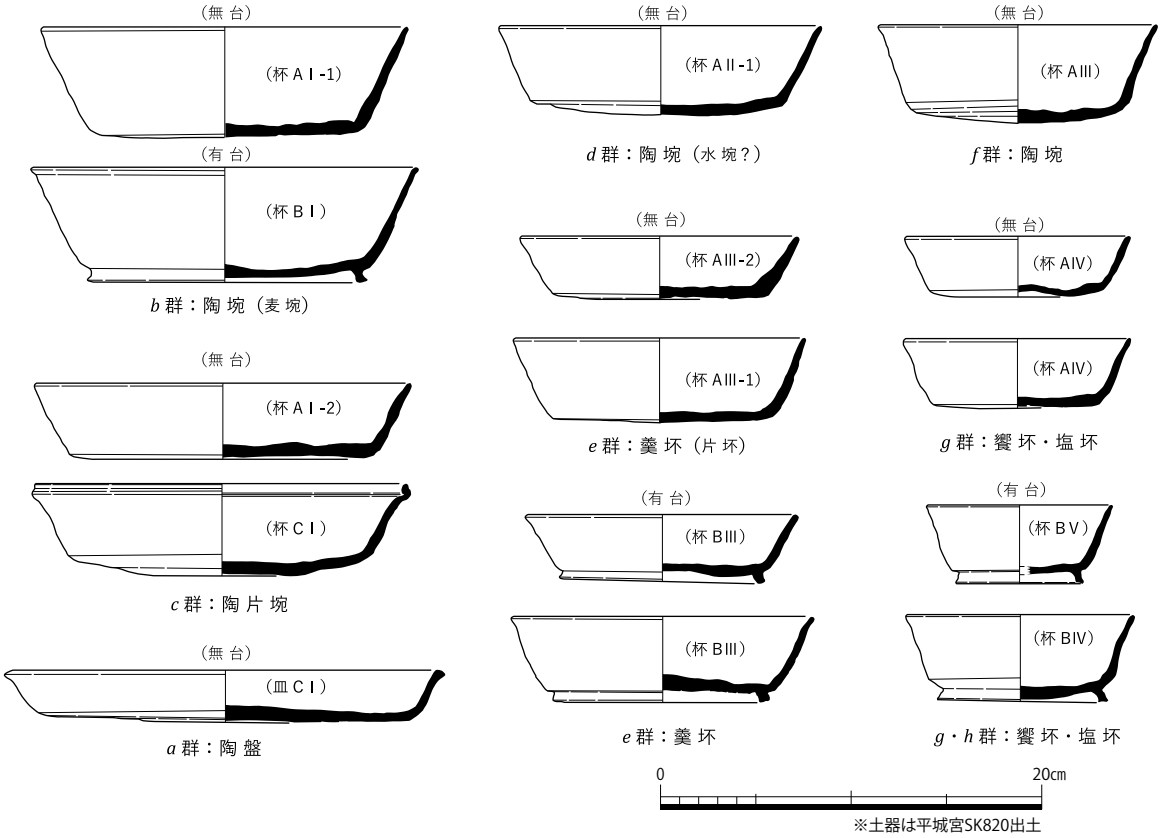

Fig. 36　須恵器食器の器名比定（奈良時代後半）

にあてておくのも一案である（Fig. 36）。ちなみに *f* 群は口径 125 ～ 150㎜、器高 50 ～ 65㎜の深形食器で、他の食器とは明瞭に区別できる実用上の一器種として飛鳥Ⅳには定着しており、それが奈良時代にいたってもなお使用されているものである。

須恵器食器の構成原理　天平宝字年間の写経所文書に見えている陶器の名前と、平城宮・京で出土する須恵器食器との対応関係を整理してゆくと、陶器の食器構成原理が、土師器のそれとは大きく異なっていることに気づくであろう。端的にいって、須恵器の食器は盤（佐良）をのぞき、用途を暗示させる一字を冠しているのに対し、土師器にはそれがない。土師器・須恵器ともに椀・坏・盤という 3 大カテゴリで整序されている点は同じだが、椀と坏との分け方はまるで異なっている。要は土師器と須恵器とで、食器構成は全く同じではなかったということである。

いまここで両者を比較すると、土師器の椀は須恵器とちがい鋺形と片椀とからなり、坏のほうでも土師器は片坏（のち枚坏）と窪坏とを区別する程度である。土師器における片埦・片坏・片盤は、須恵器よりも食器の種類が少なかったことを暗示していると思われる。しかしながら、東大寺写経所では須恵器の麦椀の代わりに水椀を充てたり（Ⅱ章 5 節）、塩坏の一部として饗坏を数えたりしており（Ⅱ章 6 節）、結局のところ土師器の食器構成と大差はないのである。したがって麦椀と水椀、それに羹坏・饗坏・塩坏という基本的構成はあくまでも理想的かつ理念的なものであり、実際にはその一部を間引いて用いたのであろう。

3　東大寺写経所の食器構成

四器・五器構成　正倉院文書からうかがえる食器構成は、おもに天平宝字年間における東大寺写経所と、宝亀年間の奉写一切経所とでやや異なる。前者が写経事業ごとに食器を入手しているのに対し、後者は奉写一切経司から引き継いだ食器を適宜組み合わせて、当座の食器セットとしているからである。本節では、主として天平宝字年間におこなわれた写経事業の食器セットを見比べてみよう。

Tab. 13 では、東大寺写経所で使用されたとみられる食器の器名とその員数をまとめた。この表によれば、食器はおもに土器からなり、椀＋坏＋盤を基本的な構成としていることがわかる。例えば、天平勝宝３年の写書所では

筍＋水椀＋坏＋塩坏＋陶盤・・・**五器構成**（陶器のみでは四器）

が使用されていた。また、天平宝字２年の御願経書写のときは

麦椀＋羹坏＋饗坏＋片盤・・・**四器構成**

が請求されていたし、天平宝字４年の奉写称讃経所でも、

鋺形＋大片椀＋陶坏＋塩坏＋盤・・・**五器構成**

であった。さらに、経師集めに苦労した周忌斎一切経書写のときは、事業開始当初に方々からかき集めた食器から、そこでの需要を満たすだけの員数が揃うものを抜き出すと、

大筍＋陶片椀＋土坏＋塩坏＋佐良・・・**五器構成**

という食器構成がうかがえる。そして天平宝字６年以降の３事業では、次節で詳しく述べるように筍＋陶椀＋陶片椀＋羹坏＋塩坏＋陶盤という六器が標準となっている。

水椀は飯器か　陶器における四器と五器とのちがいは、Tab. 13 によれば片椀を含むかどうかに起因している。つまり椀が１種類か、それとも２種類あるかによって、一人前の食器構成が変わるのである。そのいっぽうで、坏は副食器としての羹坏≒坏と、調味皿としての饗坏または塩坏とからなり、このうちのいずれかを欠く事例は確認できなかった。また盤（佐良）は、一人前の食膳に必ず１口は付く。

さて五器構成の場合、椀と片椀とのどちらが飯器として用いられたのであろうか。写経所の食器には①陶椀＝水椀／麦椀と②片椀との２種類のほか、「鋺形」という器名も見える。そしてこの鋺形が、Tab. 13 では陶椀＝水椀／麦椀の欠如を補っているようにみえるであろう。ここから考えられるのは、陶椀とも水椀・麦椀とも呼ばれる器種が、その用途において鋺形とは互換的な関係にあるということで

Tab. 13　東大寺写経所の食器構成

写経事業	事業期間	木製容器		椀			坏		盤
		筍	折櫃	陶椀／水椀・麦椀	鋺形	片椀	坏＝（陶）羹坏	饗坏・塩坏	
写書所	勝宝３年～４年	13合		水椀　13口			坏　13口	塩坏　26口	陶盤　13口
御願経書写	宝字２年６月～11月			水椀＋椀　150口			羹坏　200口	饗坏　150口	片盤　150口
奉写称讃経所	宝字４年６月～７月				200口	大片椀 200口	陶坏　100口	塩坏　100口	盤　100口
周忌斎一切経	宝字４年８月～５年５月	138合	50合	水椀　15口		陶片椀 250口	土坏　100口	塩坏　200口	佐良　200口
石山院奉写大般若経所	宝字６年２月～12月	30合	30合	陶椀　40口		片椀　60口	陶坏　60口	塩坏　60口	陶盤　60口
大般若経二部千二百巻	宝字６年12月～７年４月	60合	41合	陶椀　100合		陶片椀 100口	陶羹坏 100口	塩坏　90口	陶盤　111口
大般若経一部六百巻	宝字８年８月～12月	44合	22合	陶水椀　30合		片椀　80口	坏　80口	塩坏　80口	陶佐良　80口

ある。そしてここで、鋺（かなまり）が飯器として使用されたことを示すいくつかの証拠として、鋺で水飯を食べすぎる三条中納言の話（「今昔物語集」本朝部　巻第二十八）や、「大盤振舞い」の語源ともいわれる埦飯（おうばん）の習慣、それに『延喜式』に垣間見える土師器の「飯埦」（巻35　大原野祭料・松尾祭料）・「飯盛土埦」（巻35　平野祭料）という器種の存在を思い起こすと、結局は陶埦や水埦・麦埦も、その用途において鋺形と同格であったといえるであろう。また上では、麦埦が水埦によって代用されたことを見たが、これも水埦が飲器としてではなく、麺類を含む米麦類を食べるための食器として用いられたことを暗示しているように思われる。

要するに、大口径で深手の埦は、土・陶を問わず飯器であったと考えるわけである。そして須恵器にかんしていえば、「水埦」とはいいながら、実際には飯器として用いられたのではないだろうか。これは現代日本人が、「お茶碗」を喫茶用の飲器としてではなく、飯碗として用いていることと案外よく似ているのである。

須恵器中心の食器　ところでⅡ章9節では、天平宝字6年から7年にかけての大般若経二部千二百巻書写（以下、二部大般若経と呼ぶ）のとき、食器がすべて須恵器であったことを述べた。予算書案などでは土師器か須恵器かが判然としなかった器種が、決算報告案ではすべて須恵器であったことからみて、この写経事業では土師器の食器を用いていなかったと考えられる。このときの食器構成は、

六器構成：　大笥＋陶埦＋陶片埦＋陶羹坏＋陶塩坏＋陶盤（大笥以外はすべて須恵器）

であったが、これとまったく同じ食器構成は、ほかの写経事業でも用いられていた。そのひとつが石山院奉写大般若経所でおこなわれた大般若経書写事業（天平宝字6年、石山院大般若経という）で、もうひとつは大般若経一部六百巻書写事業（天平宝字8年、一部大般若経と呼ぶ）である。前者は造石山院所にある仮設の写経施設で大般若経の書写を開始するにあたり、筥陶司から経師らの食器として充当されたもので、その組み合わせは

六器構成：　笥＋陶埦＋片埦＋陶坏＋塩坏＋陶盤

である。また後者のときも、その予算書案では

六器構成：　大笥＋陶水埦＋片埦＋坏＋塩坏＋陶佐良

となっていて、二部大般若経および造石山院所で用いられた食器とは基本構成が同じである。これら三者の間では、陶羹坏は「陶坏」とも、単に「坏」とも書かれていて、その表記に揺れがあるものの、塩坏との対他関係において、これらが同じ器種を指すのが明らかである。二部大般若経のときの食器構成を参考にすると、これらはすべて須恵器の食器を指している可能性が高い（Tab.13の網部）。

また、Tab.13に掲げた器名のうち、明らかに土師器を指しているのは周忌斎一切経書写のときの「土坏」または「土埦」100口のみであって、そのほかが土師器であったとは断言できない。そして上で見たように、用途名称をもつ埦類・坏類が須恵器を指すならば、天平宝字2年の御願経書写のときの四器（水埦＋羹坏＋饗坏＋片盤）も、やはり須恵器であったと考えられるのではないか。天平宝字年間の東大寺写経所では、おもに四器ないしは五器からなる須恵器の食器が用いられたというのが、本書の結論のひとつである（図版3）。ここで須恵器が用いられたのは、その堅牢さのゆえであろうか。

西弘海の解釈　二部大般若経および一部大般若経の2事業にかんしては、その食器構成について、すでに西弘海の詳しい検討[6)]があるので、ここでその概要を示しておこう。西がこの2事業に着目したのは、その用度解案（予算書案）から食器の構成と人員数とが判明しているうえ、ことに一部大般若経のときは、「造東寺司解案」として米・調味料・副食品の人別支給量も明らかなためである。どちらも予算書案に

基づいているので、実態とは若干異なると思われるが、それでも写経所内の人員に対し、どのような組み合わせで食器セットを支給したか、じつに合理的な推定をおこなっているといえる。本書の解釈とは異なる部分もあるものの、ここで西の所論を整理すると、およそ次のとおりとなろう。

これら２事業の間では、予算書案で計上された食器の種類および員数と、それらを支給されることになる人員とのバランスがよく似ている（Tab. 15a・16a；西 1978 の第４表を転載）。そこで西は、２つの予算書案から基本的に同じ食器構成を復元した。すなわち、

六器構成：　大笥＋陶水埦＋片埦＋坏＋塩坏＋佐良・・・経　師

五器構成：　大笥＋片埦＋坏＋塩坏＋佐良・・・・・・・題師・装潢・校生

四器構成：　片埦＋坏＋塩坏＋佐良・・・・・・・・・・膳部・雑使・駈使

という３種類の食器セットである。

西はこれにくわえて、一部大般若経のときの人別食料支給量（米・調味料・副食品）を考慮に入れ、写経所内の人員には、その職掌に応じた４つの階層があったと考えた（Tab. 14；西 1978 の第５表を修正のうえ転載）。要するに、先の食器セット３種類と、事業所内格差との間には何らかの相関があると、西は考えたようである。さて、この解釈に対して、筆者はいま否定も肯定もできないが、とてもよくできた見方であると、まずは言っておこう。第一に、格差が食料支給量の差として、また食器の多少によって表示されることは、古代の現実として確かにありそうな話である。しかし厳密にいえば、西がその原著で掲げた集計表には、史料の原文と対照したところ一部に誤りが見つかり、さらにはその表で示された数字の解釈をめぐっても、ほかの見方が成り立つ余地がある。したがって西が考えたような、身分・職掌に応じた３種類の食器セットが実在したか、じつはよくわからないのである。

そこで、Tab. 15a・16a について誤記を修正し、またどの身分にはどの食器が行き渡るかについて、別の可能性を示したのが Tab. 15b・16b である。これら修正表によれば、どちらも飯器と目される大笥が支給される可能性があるのは、二部大般若経のときは経師以下雑使まで（合計 60 人で、実際に購入した大笥の数に一致する）[7]、また一部大般若経のときも経師から雑使まで（合計 44 人で、計上した大笥の数と合致する）と見るべきで、西が考えたように、膳部・雑使には大笥が行き渡らなかったとはいえない。なぜ西が、大笥の支給は写経従事者のみと考えたのか、よくわからない。しかしながら、それぞれの予算

Tab. 14　造東寺司解案による人別食料支給例（西1978の第５表を修正）

	主　食	調　味　料							副　食　品										
	米	塩	醤	末醤	酢	糟醤	芥子	胡麻油	漬菜	青菜（値）	海藻	滑海藻	布乃利	大凝菜	小凝菜	糯米	大豆	小豆	小麦
経師	２升	５勺	１合	１合	５勺	１合	２勺	４勺	２合	４文	２両	２両	２両	２両	２両	１合	２合	２合	２合
題師	２升	５勺	１合	１合	５勺	１合	２勺	４勺	２合	４文	２両	２両	２両	２両	２両	１合	２合	２合	２合
装潢	２升	５勺	１合	１合	５勺	１合	２勺	４勺	２合	４文	２両	２両	２両	２両	２両	１合	２合	２合	２合
校生	１升６合	２勺	６勺	６勺	２勺	１合			２合	２文	２両	２両	２両	２両	２両	１合	２合	２合	２合
膳部	１升２合	２勺				１合			２合		１両	１両							
雑使	１升２合	２勺				１合			２合		１両	１両							
駈使	黒米２升	２勺				１合					１両	１両							
調理食品	飯・粥								菜漬物		羹物・饗物		餅・イリマメ（トコロテン）			餅・イリマメ			索餅（ウドン）

Tab. 15　予算書案にみえる人員数と食器の積算①（西1978の第4表とその修正案）

Tab.15a　奉写二部般若経用度解案の食器用口数（西1978）

	大筒	陶水椀	片椀	杯	塩杯	佐良
	58合	40合*	120口	120口	120口	120口
経師 40人	○	○	○	○	○	○
題師 2人	○		○	○	○	○
装潢 4人	○		○	○	○	○
校生 8人	○		○	○	○	○
膳部 2人			○	○	○	○
雑使 4人			○	○	○	○
駈使 16人			○	○	○	○
計 76人	54合	40合	76口	76口	76口	76口

*原文30合
史料は「奉写二部大般若経用度解案」（大日古16-059～068）

Tab.15b　「東大寺奉写大般若経所解案」から推定した支給対象

	大筒	陶水埦	陶片埦	羹坏	塩坏	陶盤	食器構成
	60合	100合	100口	100口	90口	111口	
経師 40人	○	○	○	○	○	○	六器
題師 2人	○	○	○	○	○	○	
装潢 4人	○	○	○	○	○	○	
校生 8人	○	○	○	○	○	○	
膳部 2人	○	○	○	○	○	○	
雑使 4人	○	○	○	○	○	○	
駈使 16人	×	○	○	○	○	○	五器
計 76人	59合	76合	76口	76口	76口	76口	

○・×はそれぞれ支給対象／支給対象外と推定。
史料は「東大寺奉写大般若経所解案」（大日古16-376～382）

Tab. 16　予算書案にみえる人員数と食器の積算②（西1978の第4表とその修正案）

Tab.16a　奉写大般若経一部用度の食器用口数（西1978）

	大筒	陶水椀	片椀	杯	塩杯	陶佐良
	44合	30合	80口	80口	80口	80口
経師 30人	○	○	○	○	○	○
題師 1人	○		○	○	○	○
装潢 2人	○		○	○	○	○
校生 6人	○		○	○	○	○
膳部 2人			○	○	○	○
雑使 3人			○	○	○	○
駈使 10人			○	○	○	○?
計 54人	39合		54口	54口	54口	54口?

史料は「造東寺司解案」（大日古16-505～514）

Tab.16b　「奉写大般若経一部用度」にみえる食器の推定支給対象

	大筒	水麻利	片埦	枚坏	塩坏	佐良	食器構成
	44合	80合*	80口	80口	80口	80口	
経師 30人	△	○	△	○	○	△	六器？
題師 1人	△	△	△	△	△	△	
装潢 2人	△	△	△	△	△	△	
校生 6人	△	△	△	△	△	△	
膳部 2人	△	△	△	△	△	△	
雑使 3人	△	△	△	△	△	△	
駈使 10人	×	△	△	△	△	△	五器？
計 54人	44合	80合	54口	54口	54口	54口	

○は収納帳より、実際に支給されたことが明らかなもの。
△は収納帳に見えないが、Tab.13・15bを参考にし、実際に支給されたと推定。
＊はTab.15bを参考にし、片埦・枚坏・塩坏などと同じ数を用いたと仮定した。

書案において、大笥のみが58合、44合と端数を含んでいて、ほかの食器のように10口単位の概数ではないことを考慮すると、大笥は余剰を見込まない、予算書案のある人員数に対応しているとみるべきである。なお二部大般若経のときは、宿所で用いる寝具として畳・蓆を58枚ずつ計上しており、これは大笥の数と一致する。つまりこのとき、大笥は駈使以外のすべての人員に支給する予定であったことになるだろう。また、二部大般若経のときの陶埦40合（Tab. 15a）は、この事業の決算報告である「東大寺奉写大般若経所解（案）」（大日古16-376～382）では100合となっていて、およそ80人の全員に支給できたことになるので、Tab. 15bではこの点を修正した。

いっぽう、一部大般若経のときは書写の開始に合わせて水埦30合、枚坏・塩坏・佐良各30口を政所に求めている（「大般若経料雑物収納帳」、大日古16-517~519）が、これらは経師30人に支給したものと考えられ、題師以下駈使までの食器構成にかんしては何も教えてくれない。史料の欠落により、支給された食器の実数を明らかにできない以上、西説の正否は検証不可能である。こうしてTab. 16bは大部分が推定となるが、実際には二部大般若経のときの食器構成に準じたものであろうか。

このように考えると、天平宝字6年から同8年にかけての東大寺写経所では、判明するかぎり六器構成：大笥＋陶水埦＋陶片埦＋陶羹坏＋陶塩坏＋陶盤（ただし、駈使は大笥を欠く）がおもに用いられたと考えられ、先の推定と矛盾しない。

要するにこの時期、造石山院所や東大寺写経所で実施された写経事業では、須恵器の五器に大笥（飯器）をくわえた食器セットが標準的に用いられており、駈使のみが大笥を欠いていたと考えられよう。したがって、西が考えたようにわざわざ３種類の食器セットを想定する必要はなく、むしろ食器構成で表示される格差は小さかったともいえるのである。

吉田説の検討　ここでもうひとつ、別の学説を検討しておこう。吉田恵二は、東大寺写経所における食器構成を五器一組、四器一組、そして三器一組の３種類として復元した[8]が、これは写経事業ごとに史料を整理し、相互の関連性を検討したうえでの解釈ではない。例えば五器一組の事例として、吉田は複数例を挙げる（吉田 1982：111 頁）が、このうちのいくつかは奉写二部大般若経のときの食器セットを異なる事例として数えたものらしい。また、彼のいう四器一組の事例（「写書所納物帳」、大日古 3-537 に拠る）は、天平勝宝３年５月７日付の笥＋陶盤＋坏＋塩坏（塩坏のみ 26 口で、残余は各 13 口）からなるというが、翌８日付で収納した水埦 13 口を見逃しているため、実際には 13 人に充てた五器一組の事例とみなすべきである。そこで四器一組といえるのは、御願経書写のときの水埦（および埦）＋羹坏＋饗坏＋片盤の１例しかない[9]。また吉田がいうように、三器一組というセットが実在した可能性は否定できないが、彼は日付を同じくして偶々併記された３つの器種が、そのまま一人分の食器セットであったとみなしている節がある。ところが「写書所雑物請納帳」（大日古 12-238 ～ 242）にかんしていえば、本書Ⅱ章４節（Tab.2）で整理したように、日付ちがいで納入された五器（笥・水埦・坏・塩坏・佐良）で一組のセットがつくられた可能性があり、そのほうが他の事業で用いられた五器・六器一組との整合性を考えやすい。本書の成果を勘案すると、少なくとも写経従事者が三器一組のセットを用いた形跡はないから、それは本来の食器セットが部分的に見えているにすぎないのではないか。吉田説はこのように、史料の分析に粗漏な部分があるので、この点注意が必要である。

大笥と陶埦との関係　本節の最後に、大笥と陶埦とが、どうして１人前の食器セットのなかで同居しているかについて考えておこう。両者は材質が異なるが、大笥は木製の飯器であって、陶（水）埦も須恵器食器のなかではおそらく飯器の役割を占めている。また大笥のほうは、上述のようにきっかり所要人員分を見積もっているのに対し、陶埦のほうはその損耗を見込んだかのような概数での請求となっている。これらのいずれが、普段の飯器であったかはよくわからないが、単に炊いた米を食するときは、おもに大笥を用いたものか。いっぽう、陶埦はそのなかに麦埦・水埦を含んでいるとみられるので、純然たる米飯専用ではなく、麺食や飲用にも用いられるなど、もう少し用途が多様であったように思われる。二部大般若経のときには、事業期間中に索餅 941 藁を、値 2,907 文で購入したことがわかっている（大日古 16-379）。写経生らは、これを陶埦で食したと考えるわけである。

4　奉写一切経所の食器構成

東大寺写経所とのちがい　宝亀年間の奉写一切経所で用いられた食器の構成は、始二部一切経写経事業（宝亀３年２月～同４年６月）のときにのみ明らかである。宝亀３年２月時点で、奉写一切経司から現物で支給された食器には土鋺形、土水埦、土片坏、土窪坏、土盤と陶水埦、陶枚坏、陶盤の８種類があったが、これらの間ではその後の消費状況が大きく異なる。食器として用いられ、その消耗にともない頻繁に交換されたと考えられるのは、土鋺形と枚坏（土･陶）、土窪坏、そして盤（土･陶）の４種類である。例えば宝亀４年７月・８月の告朔解案には、「備経師等供養料」つまり経師らの食器として、土鋺形、土枚坏、土窪坏や陶盤が挙がっている。なおこの頃までに土盤は払底しており、陶枚坏もほとんど残っ

ていない。

その一方で、土水埦がさかんに実用されていた形跡はない。それは宝亀3年2月から同4年9月末までの20か月で18口が減ったにすぎず、写経所の人員には到底行き渡らない。また陶水埦は「硯并筆漬料」(「奉写一切経所告朔解」、大日古6-305および6-393)とあり、やはりそれが食器として用いられたとはいいがたい。実際その用口数は著しく少なく、この点でも枚坏や窪坏など、食器として実用された器種とは大きな差がある。およそ10年前の二部大般若経のときは、確かに食器として用いたように思われるが、始二部一切経のときは、用い方がまったく異なっていた。つまりこの写経事業のとき、陶水埦は硯として、または筆洗用の容器として用いられたとみなす。

土・陶のちがいを別にすれば、始二部一切経書写のときに使用された食器の基本構成は、実際にはほとんど使用されていない土水埦を除くと、土鋺形＋枚坏＋窪坏＋盤の四器である(図版4)。しかし天平宝字年間の東大寺写経所と大きく異なるのは、見かけにおいて土師器食器が多く用いられていることである。これは奉写一切経司(あるいは西大寺写経所)から引き継いだ食器の過半数が土師器であったことを直接反映するものである。

ここで東大寺写経所時代の典型的な食器構成として、二部大般若経のときのそれを比較に用いると、食器構成が様変わりしていることにも気づくであろう。まず、土器のなかでは飯器にあたるとみられた陶埦は、奉写一切経所では土鋺形に置き換わっていると考えざるをえない。また、前者の羹坏・塩坏と相同の関係にあるのは、後者では枚坏と窪坏になっている。しかも奉写一切経所では、大笥など木製食器が多用されていた状況はうかがえない。

決定的なちがいはほかにもある。二部大般若経はおよそ5か月間続いた写経事業であったが、このときは事業の初期に購入された食器が、途中で交換された形跡はない。その購入記録と決算報告書案との員数は基本的に一致しているので、支給された食器はかぎられた余剰分のなかでしか交換できなかったと考えられる。よって写経生らは、事業の初めに支給された食器を使い続けたのであった。しかし奉写一切経所では、増減はあるものの毎月土器を卸していて、いわば在庫を食いつぶすようにして土器を消費しており、なかには宝亀4年2月(始二部写経事業)の告朔解案に見えるように、この月に食器の用口数が増えていて、まるで食器の一新が図られたようにもみえる。つまり奉写一切経所では、およそ10年前の東大寺写経所の時分とは異なり、土器の消費がなぜか浪費的になっている。これは事業期間が長いこととともむろん関係があるが、それ以前に土器の在庫を大量に抱えていることが、大いに関係しているといえるであろう。考えてもみれば、盛期にあっても80人規模の事業所が、各器種合わせて3,600口に近い在庫を保有していることが、土器の相次ぐ支給を可能にしているのである。

食器支給の要望書　ここでひとつ、興味深い史料を紹介しておこう。宝亀3年11月16日、高向小祖をはじめとする14名の経師らが「食器漏失」を訴え、新しい食器の支給を求めたのである(「高向小祖等連署解」、大日古20-329)。この史料に名前が見える経師らの人間関係をあれこれ詮索すると、それはそれでおもしろい見通しが立つが、この話はコラム②(本書82頁)にまとめることにしたい。要するに、ベテランの経師たちがあるとき結託し、食器を失くしたから新しいのを寄越せと言い立てたのである。このことからいえるのは、食器(種々の史料からみて、それは土器であろう)は経師ら一人ひとりが管理しており、必要があればその支給を要求できた、ということである。さらにいえば、食器は単に壊れたから交換されるのではなく、表向きは特殊ながら「紛失」も新品支給の事由になりえたのである。この事案についてはほかに史料がなく、どのような食器構成であったかはわからないが、おそらく上で推定し

たような鋺形＋枚坏＋窪坏＋盤という四器構成ではなかったか。

奉写一切経所関連史料は膨大だが、食器セット一式を復元しやすい静的な史料[10]（予算書案など）がないので、東大寺写経所の史料群に比し、食器構成の復元精度がやや低い感がある。その史料は、むしろ土器の消費やライフサイクルを考えるのに向いている。しかし、その議論は本書の目的から逸脱しているので、これ以上は追究しない。

5　写経所における食と食器

一膳分のセット　上で縷々述べてきたように、古代の食器は基本的に埦・坏・盤の３種で成り立っている。このうち、もっとも器形が深いのは埦（まり･もひ）である。杯（つき）は埦よりも浅く、盤（さら）よりは深い。

埦・坏・盤の区別は、おもにその用途のちがいに対応しているであろう。このうち埦と坏とは、期待される用途やその器形によってさらに細分されている。例えば､埦には麦埦と水埦とがあったようで、須恵器の坏には羹坏・饗坏・塩坏の３種類があった。また土師器にも、埦類には片埦（かたもひ）と鋺形とがあり、坏類には枚坏と窪坏とがあった。用途や器名で細分されていないのは盤だけである。

ここで水埦と麦埦、そして羹坏・饗坏・塩坏とを並べてみると、埦類は飲器または麺食用の食器、坏類は副食器ということになろう。「今昔物語集」本朝部に見える三条中納言の話や、『延喜式』中の「飯埦」「飯盛土埦」という器名を引き合いに出すまでもなく、古代の埦類は飯器であった公算が高い。現代の飯器を「お茶碗」と呼ぶように、古代の飯器には「水埦」が含まれていたと考えても、一概に否定できるものではない。またⅡ章５節で述べたように、天平宝字２年の御願経書写のときには、おもに麺類用の食器であったとみられる麦埦の代わりに水埦が支給されていて、後者が単なる飲器でなかったことは明らかである。

そこで本書では、ひとつの前提として埦類を飯器（または麺類など準主食用の食器）とみなし、これに副食器たる坏・盤がくわわることで、一人前の食器構成ができあがったと考えることにしたい。この見方によれば、古代の食器構成には１人当たり１口の埦が付いたと考えられる。つまり埦類は、食器構成の基幹をなす器種である。問題は、１個の埦に対して坏・盤がどれくらいくわわるか、であろう。上で詳しく見たように、東大寺写経所で使用された食器構成は埦類１・２個に対して坏が２種類で１口ずつ、盤が１口というのが標準的である。経師ら１人に対しては、大笥などの木製食器を除けば、四器ないしは五器が充てられたのである。

現在のところ、副食器たる坏・盤にどのような食べ物を盛りつけたかはわからない。しかしながら、饗坏ないしは塩坏が調味用の食器で、前者が末醤ないしは醤・酢を、後者が文字どおり塩を入れたものとして、いわば調味用のうつわであったことは想像にかたくない。羹坏は饗坏や塩坏よりは大きく、やはり羹（汁物）の食器であったのだろうか。盤類が副食器であったのはよいとしても、これはこんにちの皿と同様に、その用い方はさまざまであっただろう。

器名研究の限界　ここまで見てくると、東大寺写経所で実際に使用された一人分の食器セットは、おおむね合理的に推定できたといえるのではないか。しかしながら、本研究の方法は、既往の研究に比し十二分に緻密かつ精細でありながら、結論のみを切りとってくると、大きなちがいがないのである。例えば､西弘海（1978）や吉田恵二（1982）が示した食器構成の復元案（四器から六器）とは大同小異であり、細部に見解の相違こそあれ、本研究によって40年前の先行研究が、大筋で正しかったことを検証した

ような構図さえ見てとれる。Ⅰ章で述べたように、古器名の研究はまったく人気がないが、そのなかでも数少ない先行研究をはるかに超越することは、案外難しいものである。結局、土器とその器名との対応関係を整理しつつ、東大寺写経所における食器構成を復元しようとする試みは、おそらくこれ以上には発展しないであろう。そこで筆者は、食器と食物との直接的なかかわりについて考えることで、この閉塞感を打開したいと考えるようになった。もっと簡単にいえば、どの土器で何を食べたか、それを明らかにしようというのである。つまり、容易には明らかにできないことを考えなければ、この方面での進展はありえないと思い始めたのである。

ところがこの方面の研究は、すぐにある問題に逢着する。端的にいって、食器と食物との直接的な関係は、多くの場合明らかにできない。西弘海（1978）がその文末で、「これ以上食器類の用途を詮索することは、先に述べた食器の性質からしても、ほとんど無益」と述べたように、どの食器に・いかなる食物や料理を盛り付けたかは、結局わからないのである。そしてなぜ、この種の問題には答えが出せないかといえば、それはこの食器にはこの料理という、いわば排他的な対応関係が認められないからであろう。西田泰民[11]の言を借りれば、「・・・器形と用途は1対1の関係にはなく、1つの器形に対し複数の用途がありうることがむしろ当然である。したがって当初から厳密な対応関係を想定するのではなく、緩やかなまとまりを考えるほうが現実にふさわしい」はずである。それは例えば、天平宝字2年夏の御願経書写のとき、どうやら麺食用のうつわとして請求されたとみられる麦埦150口の代わりに、水埦109口と埦41口とが支給されたことからも十分想起できることである。米にせよ「麦」こと索餅にしても、それを食するのには麦埦でも水埦でもよかったのである。ならば食器から食物を考えようとする多くの試みは、残念ながら容易には成功しないことになろう。

再現料理と土器　西弘海が述べたように、不可知の問題に取り組むことを無益とみなすのもひとつの見識だが、しかし土器という生活用具が実際どう用いられたか、とくに知らなくても土器研究はできるという、一種の割り切りを見せつけられたようで、この点やや得心がゆかない。そこでそれへの抵抗の意味を込めて、筆者はある再現料理を複製須恵器に盛り付けてみることにした。このいい加減な試みが、たとえ本書の学術的な価値を半減させるとしても、筆者はそれをやってみたくて仕方がなかったのである。

この研究費で複製してもらった須恵器食器に、索餅に見立てた麺類を盛り付けるとどう見えるか。拙論「麦埦と索餅」[12]で述べたあるイメージに基づき、筆者はその再現を試みたのである。古代の索餅は手延べ麺とされるので、このときは市販されているやや幅広の素麺を用いた。また、索餅は醤や末醤、酢などを和えた「饗料」で食したと想像できるから、市販の味噌を米酢で延ばして饗料とし、それを麺に絡めてみたのがFig. 37である。このとき用いたのは口径16.0㎝強、深さ5.5㎝の須恵器埦で、筆者が想起した「麦埦」によく似ている。というのも、この複製品は実物の「麦」字墨書須恵器をモデルに陶芸作家さんにお作りいただいたものなので、その再現性はきわめて高いのである。このようにして、筆者は天平宝字年間の東大寺写経所で、あるいは実食されたかもしれない麺の一例をまずは再現したのであった。そしてこのときの盛り付け例は、いわゆる炸醤面（日本ではジャージャー麺という）に近い見た目となった。おそらく、筆者がかつて中国鄭州の街角で食した炸醤面が、この着想の根底にあったものと思われる。

この想像の産物にかんしては、あるいは異論も生じよう。実際、筆者に近いある研究者は、写経所の索餅を汁麺であったと想像している。ところが筆者は、この異論を排するだけの明白な証拠を、何ひ

Fig. 37　索餅の盛り付け再現例

とつ握っていない。ただ「饗料」を出しているのだから、きっとそれを絡めて食したにちがいないと思い込んだだけである。それよりも、醤のイメージが固まらないまま、とりあえず味噌で代用したところに再現上の課題を認めるので、この点は大いに改善の余地がある。もとより、古代の食は不可知の領域に属しているので、このように愚の骨頂ともいうべき精神の持ち主でなければ再現できない。

多くのことが知られてしまった今、なお未知の事柄はこのように、易々とその輪郭を見せてくれるわけではない。しかしながら、土器という器物の本質を理解することは、単にその形質に拘泥することではないはずである。例えば、杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ・・・、あるいはａ手法、ｂ手法、ｃ手法などとして区別されるさまざまの皮相的な形質とは無関係に、土器は食物の容器であったのである。これはどういうことかといえば、土器はその可容性というか、その内側に何かを受容できる空間をそなえていて、それがこの器物の本質であるということである。ところがその中身はもはや残っていない―要するに、土器の本質は目に見えない。そこで、目に明らかな部分、土器の顕在的な部分を見つめることで成立しているのが従来の土器研究というならば､筆者の関心はその「見えないもの」に移りつつある。すなわち、古代の人びとは土器で何を・どのように食したか、である。本書では結局、食器と食物との関係について述べることはあまりできなかったが、古代の土器研究は今後、この方面にも関心を拡げるべきである。

なぜ、蓋がないか　　最後にひとつ、ある問題提起ともなるひとつの補足をしておきたい。東大寺写経所で使用された陶器（須恵器）の食器は、陶（水）埦を除けば、ほとんどが「口」で数える無蓋食器である。ところが平城宮･京では、これまでの発掘調査で須恵器の杯蓋が大量に出土している。要するに、須恵器食器の蓋の有無にかんして、写経所文書からうかがえる古代の実態と、考古学的な現実との間には、かなり大きな隔たりがある[13)]。

今回の計量的分析では、食器本体の大きさをとくに重視したので、杯蓋の計測は実施していない。したがって、今回明らかにした須恵器食器のどの器種に蓋があったか・なかったかは、本書ではわからないのである。そこで今後は、須恵器の杯蓋の計測を実施するとともに、東大寺写経所の須恵器にはなぜ

蓋がないかを、いずれ考える必要があるが、その前に（陶埦をのぞく）須恵器食器を、蓋なしの状態で取りそろえることができたという古代の現実に、想像をめぐらせることができよう。例えば、二部大般若経書写（天平宝字6・7年）のとき、市領に命じ市で購入させたおよそ100人前の食器のうち、陶埦をのぞく陶片埦・羹坏・塩坏などは無蓋の状態で入手している。平城京の市場では、蓋なしの須恵器も購入できたのである。常識的に考えると、それらは「合」で数えた有蓋食器よりも安価であったにちがいない。となると、写経所の給食には安物の須恵器が充てられたわけである。実際、この事業の決算報告案である「東大寺奉写大般若経所解案」によれば、市で購入した陶埦の価格は1合につき3.5文であるのに対し、陶片埦は1.8文でほぼ半額となり、同じ埦に属していても、蓋の有無で値段は大きく異なる。無蓋の陶羹坏にいたっては1口あたり1.0文、陶塩坏は0.9文で、さらに安い（大日古16-380・381）。天平宝字年間の東大寺写経所において、陶埦以外を無蓋食器でとり揃えるのは、やはりその安さのゆえではないか。

このような想像と調和的な考古学的事実を、平城宮・京で出土する須恵器食器に探してみると、焼きがあまく白色を呈し、重ね焼きのため口縁端部が黒く煤けたものや、内外に火襷が残る一群の須恵器に思いいたる。想像される窯詰めの状態から考えて、これらには蓋がつかない。それに多くは底部にヘラキリ痕を残し、大した造作もなく焼かれた粗造の食器に見える。おそらく平城京の近郊で焼かれたものであろう。今回計測した須恵器のなかでは、平城宮SK19189・19190の出土例に、この種のものがある。また時代は少し降るが、西大寺食堂院の井戸SE950から出土した須恵器食器（延暦年間に埋没）[14]も同類である（Fig. 38）。そこで天平宝字頃の東大寺写経所が入手していた須恵器も、この手の安物ではなかったかというのが、現時点での筆者の想像である。

もしも東大寺写経所跡が発掘調査によって特定できたならば、そこで出土する土器群を整理分析することで、給食用食器の実態は明らかとなろう。つまり発掘調査は、その答えを得るためのもっとも手短で確実な方法である。しかし現時点では、ほぼ同時代の出土土器を用いて、その食器を近似的に再構成する必要があり、そのためには方法を錬磨せねばならない。何を考えるにしても、いちいち根拠が必要

Fig. 38　西大寺食堂院出土の須恵器食器

である。写経所の須恵器にはなぜ蓋がないかも、一定の結論を下すまでには多くの努力を要することになろう。ところが上記のような、単なる思い付きのような想像が有害かつ無用かといえば、決してそうではない。想像とは仮説の根幹をなすものであり、方法とは密接にして不可分である。たかが蓋のある・なしにすぎないが、それには想像をめぐらし、方法を講じるだけの値打ちがあるということである。

補　註

1）椀形片埦を土師器杯ＡⅠではなく、土師器椀Ａに対比する考え方が根強い。かつて西弘海（1978）も、椀形片埦を土師器椀Ａにあてたが、それは天平末年の土器群に対してのみであって、天平宝字から宝亀年間にかけては「土窪坏」を椀Ａに対比している。西によれば、宝亀年間の「土椀形」は「・・・土師器「椀形片埦」の意であって、先の器名比定の結果に従うならば、天平末年から天平宝字末年の時期には土師器椀Ａがこの「椀形片埦」の名で呼ばれる食器であった。ところが上記の想定が正しいとすると、宝亀年間に土師器椀Ａは法量縮小の結果、「窪坏」と呼ばれる器種になったのであり、「土椀形」の器名は他の食器に求めなければならない。」という（西 1978　83-84 頁）。そしてこのあとに続く検討の結果、「天平宝字４年の「造金堂所解案」にみえる「椀形片埦」も・・・土師器椀Ａとするよりむしろより法量の大きい土師器杯ＡⅠあるいは杯ＡⅡ（土片埦）」を「椀形片埦」の名で呼んだとするほうが適当であろう。」と結論している（西 1978　84 頁）。つまり西は、最終的に椀形片埦を杯ＡⅠ・ＡⅡにあてたのであった。筆者もまた、椀形片埦を杯ＡⅠまたはＡⅡにあてる立場を採っており、定着後の椀Ａは土窪坏と表記されたと考えている。

2）『群書類従』巻一　神祇部一　1 ～ 43 頁。

3）森川　実「麦埦と索餅―土器からみた古代の麺食考」『奈文研論叢』第 1 号、2020 年。

4）『平城宮出土墨書土器集成』Ⅱ（奈良国立文化財研究所、1989 年）。

5）ここでいう「多法量的な様相」とは、須恵器食器の法量分化がもっとも押し進んだ、いわば極相としての状態を指すのではなく、産地構成の複雑さがもたらした、いわば統制の不全に起因している可能性がある。

6）西　弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」（『奈良国立文化財研究所　研究論集Ⅴ』、1978 年）。

7）しかしながら、二部大般若経書写事業の決算報告書案「東大寺奉写大般若経所解案」（大日古 16-376 ～ 382）では大笥 60 合となっているので、大笥は駈使以外の全員に支給できたことになる。

8）吉田恵二「古代宮都における食器の系譜」（『國學院大學紀要』第 20 巻、1981 年）。

9）ただし本例は、関連史料中に笥が偶々見えていない可能性があり、これをくわえると五器一組となろう。

10）こうした形容が適切とは思わないが、例えば月々の告朔解案に見える土器の用口数などは、その月々の固有の事情によってさまざまであるし、器種によっても大きく異なる。このため、つねに流動的な食器の消費状況から、ある食器セットのパターンを見出そうとすることは容易ではない。ところが、予算書案に見えている食器は見込み人員数との対応関係を看取しやすく、予算立案に携わった人物が仮想した静的かつ理念的な食器セットが、労せず見つかることがある。前節で見たように、西弘海（1978）も二部大般若経・一部大般若経の予算書案を用いつつ、いくつかの食器構成を復元している。

11）西田泰民 「土器の器形分類と用途に関する考察」『日本考古学』第 14 号、2002 年、日本考古学協会。

12）森川、前掲註３）文献。

13）奈文研分類にしたがえば、杯Ａ（無台）には蓋がない。このため杯蓋は、自動的に杯Ｂ（有台）のそれと考えることになっている。確かに、奈良時代の杯Ａには蓋をもたないものが一定量含まれると思うが、それにしても杯Ａに見合う「杯Ｂ蓋」がまったくないとはいえない。無台食器に蓋があるか・ないかは、土器群ごとに蓋と身との関係について検討を加えたうえで、個別に判定されるべきであって、一律に「杯Ａには蓋なし」とみなしてよいかは疑問である。

14）奈良文化財研究所『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』、2007 年。

コラム②　食器の支給を願い出た経師たち

宝亀3年11月16日､14名もの経師らが食器の「漏失」を訴え､「依彼数将進」、つまり新しい食器を人数分支給してもらえるよう願い出た。「諸房内飯人事」という書き出しで始まる「高向小祖等連署解」（大日古20-329、以下では「連署解」とする）で食器の支給を訴えたのは、高向小祖を筆頭に鬼室石次、大宅童子、陽胡穂足、丈部濱足、石川宮衣、金月足、山辺千足、秦吉麻呂、壬生廣主、山部針間麻呂､小治田乙成（以上12名は経師）と､古兄人、刑部廣濱（以上2名は装潢）の14名である。この日小治田乙成は不在で、古兄人は休暇中であった（「経師請暇并不参解継文」、大日古20-050）ため自署していないが、彼ら二人の分を含む食器の支給がまとめて申請されたものと推測できる。

彼らはいかなる機縁に基づく集団で、なぜ同時に食器の一新を願い出たのであろうか。その背景を知るためのキーワードが「漏失」である。つまり高向小祖らが訴えた食器の「漏失」とは、いったい何であろうか。まずはこの言葉の意味を明らかにしておこう。

『日本古代人名辞典』にみえる経師ら14名の事績によれば、「・・・他の十四人と共に食器を漏失」（高向小祖：4-1050)、「高向小祖ら十四人とともに、房内の食器を漏失した」（秦吉麻呂：5-1350)、「･･･その食器を漏失し」（山辺千足：6-1791）などとあり、漏失は他動詞として用いられている。つまりこの場合の「漏失」は、経師らが「食器を失くした」という意味に近い。現にこの人名辞典のなかには、「・・・食器を紛失し」（刑部広濱：2-0444）とした記事もある。このように「漏失」とは、何かを失くすという意味で用いられている。そこでほかの用例を探すと、例えば大伴家持が、天平18年正月の宴席で読まれた歌の多くを「漏り失せたり」として、万葉集3926番歌の左注で惜しがっているのは、それらの歌が記録から逸失してしまい、いまは残っていないことを意味している。要するに、高向小祖らは、どういうわけか同時に食器を「失くした」と主張したのである。そこでこの一件を、本稿では「食器漏失事件」と呼ぼう。

事件の背景を明らかにするためには、彼らの身辺をまず調査する必要がある。そこで『日本古代人名辞典』を用いつつ、この14名の周囲を洗い出してみると、彼らは次のような集団であった。

① 彼らのなかには天平年間から写経事業に従事している経師（山辺千足・鬼室石次・山部針間万呂）がおり、天平勝宝・天平宝字年間にはすでに経師であった者（高向小祖・大宅童子・秦吉麻呂・金月足・丈部濱足および小治田乙成・壬生広主）も多い。

② 宝亀3年当時の推定年齢がわかる経師が3人おり、山部針間万呂は49歳、丈部濱足は55歳、鬼室石次は59歳である[1)]。判明している経師の年齢から考えて、その主体は50歳代で、いずれもベテラン経師であったと思われる。

③ 経師12名は、宝亀3年12月から同4年12月までの布施支給リストである「奉写一切経所解（案)」[2)]のなかで、歴名の順番がつねに第3位（高向小祖）から第14位（金月足）までを占めている[3)]。そして12人の中での順序の異同は少ない。要するに彼らは、写経所内で意味のある序列の上位を占める経師たちである。

④ 連署解が出された11月16日、小治田乙成（経師）と古兄人（装潢）は不在であったが、高向小祖らの判断によって、二人の食器も一緒に交換されたと推測できる。この二人の支給申請は、高向らによって代行されたわけである。

以上4点から推測すると、彼らは手持ちの食器を偶々紛失した不運な者たちの集合ではなく、年齢と経歴が似通ったベテラン経師たちであったと思われる。おそらくこれまでの写経事業で、長く寝食を共にした仲間意識によって結ばれた集団であったのであろう。そうなると、高向小祖を筆頭とする集団は、自分たちの食器を一新するためにその「漏失」を訴えたようにも見える。食器が本当になくなったのか、その真相は明らかにできないが、この不自然な連署解の背景に、写経所生活が長い経師たちの馴れ合いや狡知をみてとれるのではないか。

またこの文書からは、経師らは写経所から支給された食器（土器）を個人で管理していたこともうかがえる。そして経師一人ひとりは、自分の食器に使用上の不具合が生じたとき、写経所に新しい食器の支給を申請していた。現代の学校給食や社員食堂のように、食器は日々共用されているわけではなかったようである。

補　註

1）『日本古代人名辞典』の各事項に拠る。

2）該当する史料は大日古6-486～497、6-523～535、22-195～206、6-544～556、6-557～566である。

3）なお、経師への布施支給で順位が第1位なのは念林老人、第2位は荊国足で、この順序も変化がない。連署解の筆頭にみえる高向小祖は、荊国足に次いで3番目に名前が挙がることが多い。このうち、荊国足の推定年齢（宝亀3年当時）は54歳であった。したがって､布施支給リストの歴名順序は、おもに経師らの年功にしたがうものと推測できる。